

図書館消えた



教育委員 吉田一徳

2月4日付の北海道新聞夕刊の一面に、衝撃な見出しに目を見張りました。

焼き物の町として有名な愛知県常滑市で、建物の老朽化により図書館が無くなったものの、財政難で新設ができないということでした。

新聞によると残された蔵書は、分散して公民館などの図書室で利用できるものの、利用実績の少ない図書は処分したとのことでした。

この記事を読み、常滑市でさえ財政難であるということ、そしてそのことによって図書館も犠牲になるということに驚きと落胆の思いでした。

今や本はどこにいてもスマホやタブレットで電子書籍の形で読むことができ、様々なジャンルの本がダウンロード可能になっています。紙媒体の本を買う場合も、ネットで検索して確定を押せば大抵のものは数日中に届きますし、海外の専門書なども簡単に見つけて購入することができます。

でも実際に図書館や書店をぐるっと一周すると、興味が無かった分野の本でもタイトルや表紙のデザインがちょっと目に留まるが多々あります。その場合は直に手に取ってパラっとめくるだけで未知の領域が広がり始めますし、匂いや質感がダイレクトに感じられるので、私は図書館や本屋に行くことが大好きです。

なによりも本に囲まれているだけで安心感がありますし、常に興味を引く本がないかワクワクしながら廻って、グッとくる1冊を見つけた時にはお宝を探し当てたような高揚感があります。

図書館は老若男女問わず、気軽に楽しめる知識の宝庫です。その図書館が失われるということは、地域にとって多大な損失に値すると思ひ、常滑市にはなんとかかならないものかと願うばかりです。

幸いにもわが町弟子屈町は、複合施設としての図書館新設計画が進んでおり、完成した際には町民みんなが学び、楽しめる施設になることを切に願います。



次回のリレーコラムは宮田委員です

教育委員コラム

Column of the member of the board of education

No. 32

2022/4

発行	弟子屈町教育委員会
教育長	岩原 勝行
教育長職務代理者	金井 秀明
委員	菅原 誓之
委員	吉田 一徳
委員	宮田 昇子

J A 農協青年部からマスクの寄附

教育長 岩原 勝行

3月18日、釧路地区農協青年部協議会からマスクセットの寄贈を受けました。オミクロン株の影響で、1月に入ってから管内でも子供たちへの新型コロナウイルス感染が確認されるなど油断できない状況が続いていることから、感染症対策に役立ててほしいとのことで、本町には新入学児童分（40セット）を寄贈して頂いたものです。

J A 摩周湖農協青年部の中澤好喜部長から、牛の柄をあしらった小学生用マスクと保護者用マスク、収納ケースのセットが手渡され、一日も早いコロナの収束と牛乳の消費拡大を願っています。心から感謝申し上げます。



アニマルフットプリント

教育長職務代理人 金井 秀明

弟子屈町文化財であるマリゴケ調査のために、屈斜路湖マリゴケ浜に行ってきました。この時期、マリゴケ浜に通じる林道は閉鎖されているため、地権者に了解を得てスノーモービルで鹿柵まで行き、後はスノーシューを履き、林を抜けマリゴケ浜まで行ってきました。湖畔に設置したカメラのデータ回収と電池交換が目的です。

林の中、新雪の上に動物の足跡（アニマルフットプリント）を沢山見ることができました。写真はエゾリスの足跡です。行ったり来たりと忙しそうな足跡です。きっと餌を探しに行ったのでしょう。こんな足跡を見ることができるのも、調査の特典です。

最後に、調査のためご尽力くださった教育委員会の皆様にお礼申し上げます。



東日本大震災に想う

教育委員 菅原 誓之



ご存じの通り、今年で11年目の3月11日を迎えた。当時を振り返ると、私は僧侶としてワゴン車いっばいに支援物資を載せ弟子屈を出発した。青森港でフェリーを降り、仙台までの海岸線を車で走りながら、各避難所に物資を配り、時にはご遺体安置所での読経ボランティア活動もさせて頂いた。その後3日間滞り・活動し帰路へ。弟子屈に着き車のメーターは往復で2,000キロを指していた。

また、活動中に宮古市の小学校（避難所）との交流が出来る事となる。以後、各団体や企業から支援物資を提供頂き、4回にわたり弟子屈の仲間と現地に入り活動しながら、追悼法要やお盆法要もお勧めさせて頂いた。今もお約2,500人あまりの方々が行方不明であり、少しでも多くの方が家族のもとに帰られることを願う。（写真は道中、陸前高田市で撮影）

手をいれないで

教育委員 吉田 一徳

コロナが収まりつつあった昨年11月に、福岡県の大牟田市動物園に行ってきました。

ここは一見かなりオールドスタイルな動物園ですが、スタッフによるエンリッチメント（※1）やハズバンダリートレーニング（※2）等で注目されている動物園です。

園内のあちらこちらで創意工夫があり、見どころ満載です。そのなかでも衝撃だったのがこの看板で、鉄格子の中に手を伸ばせば触れる距離にハクビシンというネコ位の大きさの動物がいたのですが、その手前に「手をいれないで」の一文が。



このハクビシン、どんだけ凶暴なのか気になります。

※1 豊かで充実した飼育環境にする方策
※2 世話・治療などがしやすいよう、飼育動物に行うしつけ。

そこに住む理由を言える町

教育委員 宮田 昇子

釧路北部地域雇用創造協議会と町が主催する講演会に参加しました。中・高生の保護者を対象としたもので、町の将来性について理解を深めることで、若者の町内での就職促進と定着につなげることが狙いです。

㈱日本総合研究所主任研究員の藻谷浩介氏が「都会よりはるかに明るい弟子屈の未来と可能性」と題して講演。その後、講師と町の地域おこし協力隊員・川上 椋輔氏、高橋志学氏による座談会が行われ、地元の人気が気づけない弟子屈のポテンシャル、都会と地方における高齢化と人口推移の展望などが示されました。

「将来残る町とは、住民がそこに住む理由を言える町」という講師の言葉が印象的でした。



制服のズボンから大きくはみ出した足首。その長さが、3年間の成長を物語っているようでした。

3月、各小中学校、弟子屈高校で卒業式が行われ、子どもたちが通い慣れた学び舎を巣立っていきました。小学生は5、6年時、中・高生は2、3年時がコロナ禍で、学習活動や学校行事など様々な場面で制限を余儀なくされてきました。当たり前が当たり前ではなくなってしまった中、我慢を強いられながらも学びと経験を重ねてきた晴れ姿を眩しく見せていただきました。

春からの新生活が楽しく実り多きものであるよう願うとともに、そのために地域の大人ができることは…と、改めて考えたひととき。

（宮田）

編集後記